



事業計画及び成長可能性に関する ご説明資料

2026年8月12日

株式会社キャンバス
(東証グロース 4575)

当社は「がんを治したい」という思いをもとに2000年1月に創業して以来、一貫して、独自の抗がん剤候補化合物を自社で創出し臨床開発を進めています。

最先行の候補化合物・免疫着火剤CBP501は、膵臓がん3次治療対象の臨床第2相試験に成功(主要評価項目達成)した後、米国規制当局から受けた第2b相試験開始承認をペンディングし、現在は欧州での臨床第3相試験に向けた開始申請と試験開始準備を進めています。

欧州臨床第3相試験開始承認取得の見通しについては、取得可能性と時期に分けて不確実性をお伝えしています。取得時期に関しては未だ不確実性が大きく明確にお伝えできないものの、開始承認取得自体の不確実性は、薬剤製造に関する規制への適合などが進捗し着実に低減しています。引き続き最優先で、最速・最善での進行を目指す方針に変わりありません。

後続パイプラインである可逆的XPO1阻害剤CBS9106は、2025年6月に提携を解消し全権利の返還を受けました。今後の開発方針は、追加で実施する基礎研究の成果や会社の財務状況などを勘案して決定します。

現在は、次世代の臨床開発パイプラインを創出する基礎研究中から創出した免疫スイッチ作動薬CBT005の前臨床試験開始を後続パイプライン中の最優先課題として、準備を進めています。

これらのほか、基礎研究・最適化段階のIDO/TDO阻害剤も、日本に続き米国で特許が成立しました。最近では、AI（人工知能）を利用した創薬共同研究も始めています。

一般に、創薬企業による自社創出パイプラインの開発戦略は、製薬企業等との提携によって開発資金の調達や共同開発・開発費負担の軽減を図る「創薬基盤技術型」と、自ら一気通貫で後期開発まで進める「創薬パイプライン型」に大別できます。

当社は、各パイプラインの状況ごとにリスクとリターンを勘案して、最適の事業モデルを選択していく考えです。

私たちは、CBP501については「創薬パイプライン型」で開発可能な財務基盤の確保が当社の中長期的な企業価値最大化に最も適していると判断しています。

他のパイプラインについても、それぞれの特徴に合った開発方針・事業モデルを選択してまいります。

当社のような研究開発段階の創薬企業の価値向上はひとえに、適切な適応疾患領域における開発の進捗によってもたらされます。

私たちは、適時的確な情報開示を徹底しつつ、株主・投資家の皆様のご支援にお支えいただき、今後もスピード感を持って研究開発や事業開発・広報に取り組み、その成果が正当な企業価値に適切かつ速やかに反映されるよう邁進します。

皆様には引き続き一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2026年8月
株式会社キャンバス 代表取締役 河邊拓己



キャンバスの成長可能性の源泉

有望な最先行化合物CBP501

- 作用機序 **免疫コールド→ホット**
- 化合物や会社の特徴に合った初期開発対象 **膵臓がん3次治療**
 - ✓ 承認された既存治療なし・免疫チェックポイント阻害抗体が効きにくい
- ✓ 3剤併用臨床第2相試験で得られている **有望な臨床データ**
- 欧州臨床第3相試験申請の進捗
 - ✓ オーフアンドラッグ指定、科学相談などを通じて欧州規制当局との相互理解が進行

後続パイプラインと、今後も継続的に新薬候補を創出する体制

- CBT005（前臨床試験準備中） CBS9106（臨床第1相終了） CBP-A08など
- **がん免疫**に着目した深い知見の蓄積
 - ✓ 基礎研究と臨床開発との少人数・緊密な連携サイクル

会社概要・強み・事業モデル

キャンバスは、自社創出・複数の臨床開発パイプラインで
ブロックバスター* を狙える新規抗がん剤を研究開発している**創薬企業**です

* 年間の売上高が10億ドル（約1500億円）を超える画期的新薬

会社名	株式会社キャンバス 英文名： CanBas Co., Ltd. 証券コード： 4575
代表者	河邊 拓己 （代表取締役社長 M.D., Ph.D.）
本社	静岡県沼津市大手町2-2-1
設立	2000年1月18日
事業内容	抗がん剤の研究開発
従業員	19名 うち 研究開発部門 14名（派遣等による専従者1名含む） 管理部門 5名

事業目標

より良い抗癌剤を一日も早く患者さんにお届けすること

経営理念

フェアであること
科学的・倫理的・経済的に正しい道を最短の距離・時間で進むこと

■ マネジメントチーム



河邊拓己（かわべ たくみ）代表取締役社長

内科医、医学博士。京都大学大学院分子医学系専攻修了（免疫研究所所属）。京都大学ウイルス研究所助手、ワシントン大学（セントルイス）で博士研究員として勤務。名古屋市立大学医学部分子医学研究所で助教授在任中、科学創業者として当社創業に参画。2001年当社取締役就任を経て2003年から代表取締役社長。



加登住眞（かとすみ まこと）取締役最高財務責任者兼経営企画室長

日本合同ファイナンス（現ジャフコグループ）で投資営業部門と企画部に従事した後、2000年にバイオ特化VC・MBLベンチャーキャピタルの設立に参画。同VC常務取締役として多数の国内バイオ企業への投資を実行。同VCの投資先であった当社へ2005年に転籍、取締役CFO就任。



坂本一良（さかもと かずよし）取締役管理部長

チェースマンハッタン銀行東京支店、NIFコーポレートマネジメント取締役を経て、2008年に当社入社。2010年取締役経営企画部長就任、2020年から取締役管理部長。



日比野敏之（ひびの としゆき）研究開発部長

中外製薬で臨床開発等に携わった後に金融業界へ転じ、三菱UFJ証券（現三菱UFJモルガン・スタンレー証券）および三井住友アセットマネジメント（現三井住友DSアセットマネジメント）で医薬品セクターアナリストを歴任。2020年当社に入社、研究開発部長。

取締役監査等委員

小宮山靖行（こみやま やすゆき）

住友銀行（現三井住友銀行）勤務を経て社会保険労務士として2004年に独立。2016年社会保険労務士法人みくりや社中を設立、代表就任。2016年に当社取締役監査等委員就任。

白川彰朗（しらかわ あきら）

日本合同ファイナンス（現ジャフコグループ）、ジャフコ公開コンサルティングでVC投資とIPOコンサルティングに従事した後、1998年インテリジェント・キャピタルゲイトを創業し社長就任。2006年当社非常勤監査役就任、2016年に取締役監査等委員就任。

古田利雄（ふるた としお）

篠崎芳明法律事務所（現篠崎・進士法律事務所）を経て1993年古田利雄法律事務所（現弁護士法人クレア法律事務所）を設立し代表弁護士就任。2007年当社非常勤監査役就任、2016年に取締役監査等委員就任。モダリス取締役監査等委員を兼任。

SAB（科学顧問会議）

Daniel D. Von Hoff, MD, FACP, FASCO, FAACR

Translational Genomics Research Institute (TGen) 臨床ゲノミクス・治療学 特別教授
Mayo Clinic 教授
Virginia G Piper Distinguished Chair for Innovative Cancer Research (HonorHealth 名誉会員)
元FDA Oncology Drug Advisory Committee (ODAC) メンバー
City of Hope研究センター 腫瘍学・治療研究科 特別教授
2002年、当社SAB組成時にチェアマン就任。

Donald W. Kufe, MD

Harvard Medical School 教授
Dana-Farberがん研究所名誉医師
Dana-Farber/Harvard がんセンター NCI Experimental Therapeutics Clinical Trials Network (ETCTN) UM1プロジェクト フェーズ1及びフェーズ2プログラム共同主任研究者
AAP（米国小児科学会）、ASCI（米国臨床研究学会）、SITC（がん免疫療法学会）会員
2002年、当社SAB組成時に就任。

■ 独自に創出した複数の化合物を臨床開発段階に進めている実績があります

- ✓ 本社に研究所と動物実験施設を有し基礎研究に注力
- ✓ 外部協力機関を効率的に活用し、米国FDA規制・欧州EMA規制下での臨床開発体制構築



中長期の企業価値の源泉として重視

	探索・創出	最適化	前臨床試験	臨床試験			提携・導出 共同研究等
CBP501 創薬パイプライン型展開	第2相試験で主要評価項目達成 米国第2b相試験開始承認取得・欧州第3相試験開始申請						
CBT005 免疫スイッチ作動薬 がんの「治癒」を目指す 新たな免疫系抗がん剤	前臨床試験準備						
CBS9106 可逆的XPI1阻害剤 現在は新開発方針検討中	前臨床試験終了し導出			第1相試験完了			2025年6月 全権利返還
CBP-A08 CBP501の系譜に属する ペプチド型免疫系抗がん剤	最適化終了						
IDO/TDO二重阻害剤 ほか※							静岡県立大学 ほか

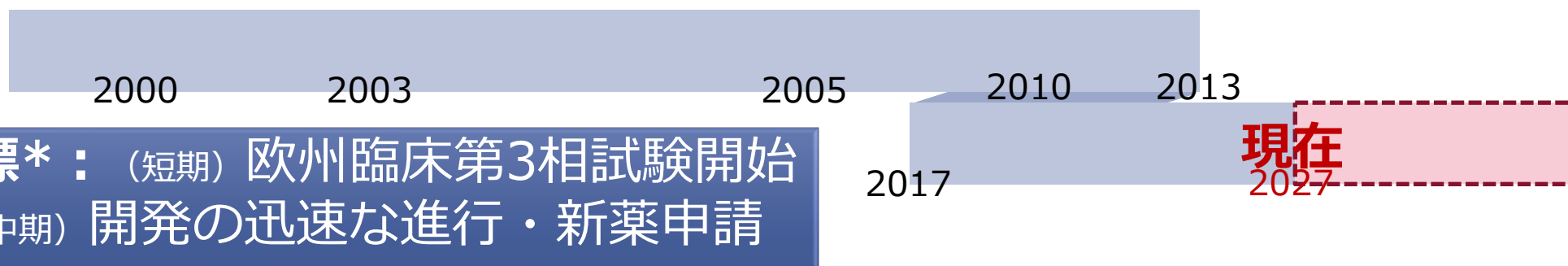
※ 上記のほか、がん免疫領域で広く基礎研究を展開しています。

※ IDO/TDO二重阻害剤は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）新規治療薬としての研究も継続

研究・開発



CBP501



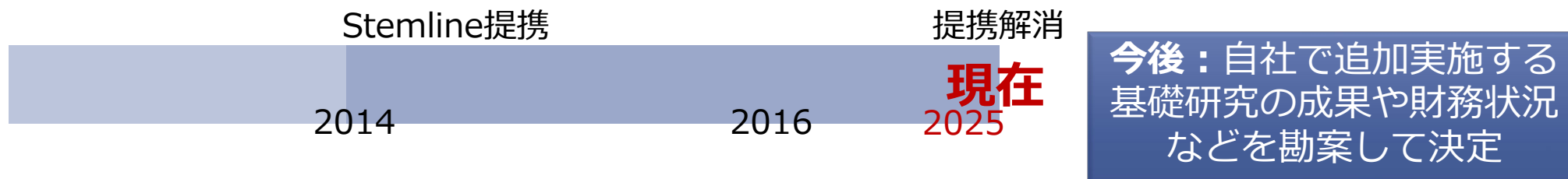
* 2025年10月24日開催の当社取締役会において、欧州臨床第3相試験開始承認が未だ取得できていない状況を踏まえ、試験実施・新薬承認申請等に要する期間を考慮するとそれまでの開発目標「2027年新薬承認・上市」の実現が困難と判断し、開発目標を変更しました。現在申請中である臨床第3相試験開始承認を取得した後、当該開始承認の内容等も考慮して、より具体的な目標を改めてお知らせします。詳細は同日の適時開示をご参照ください。 <https://ssl4.eir-parts.net/doc/4575/tdnet/2700931/00.pdf>

CBT005

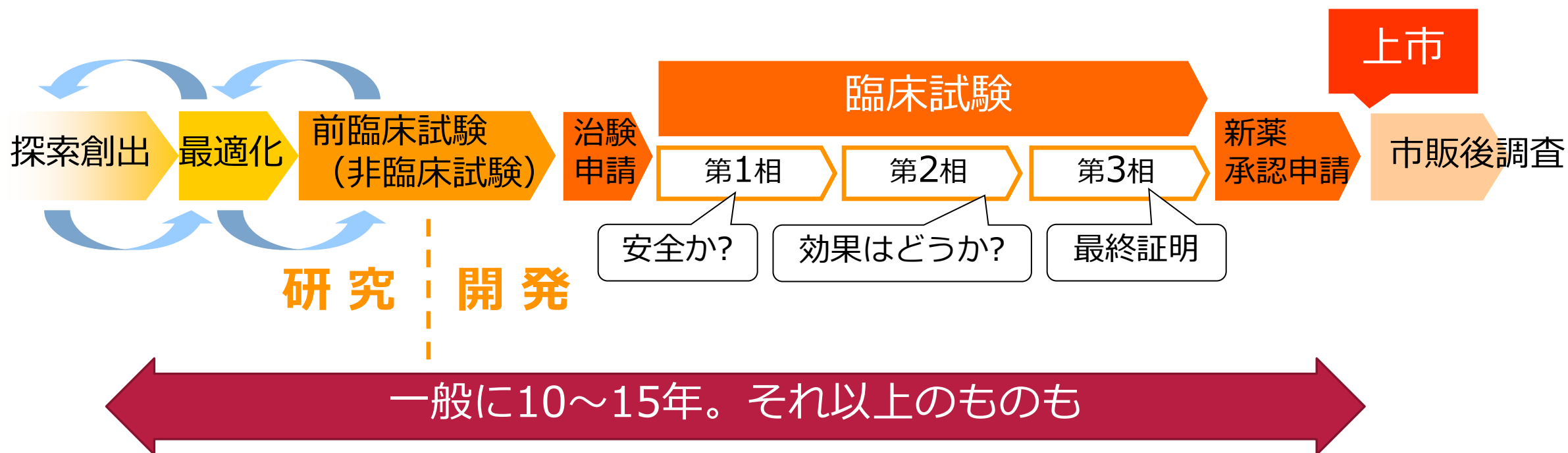
前臨床試験準備開始
2024

目標 : 前臨床試験早期開始

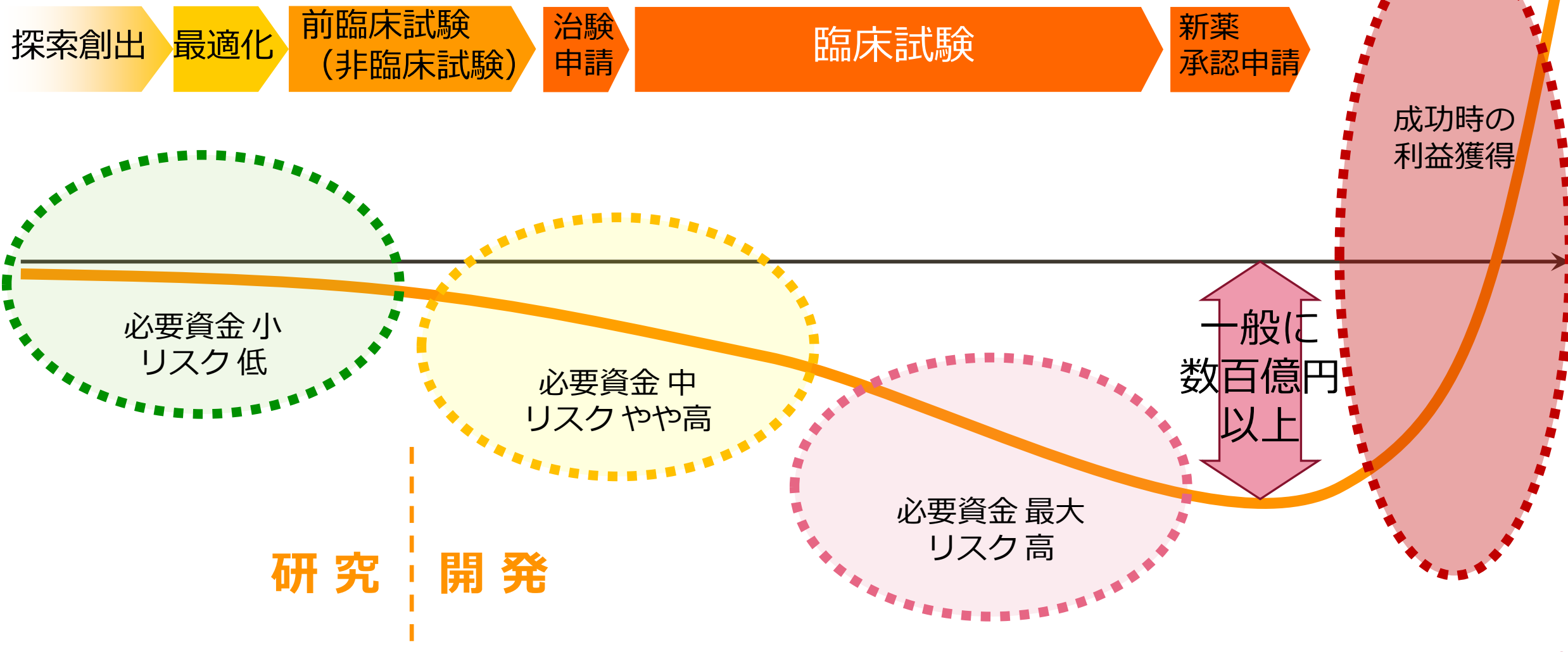
CBS9106



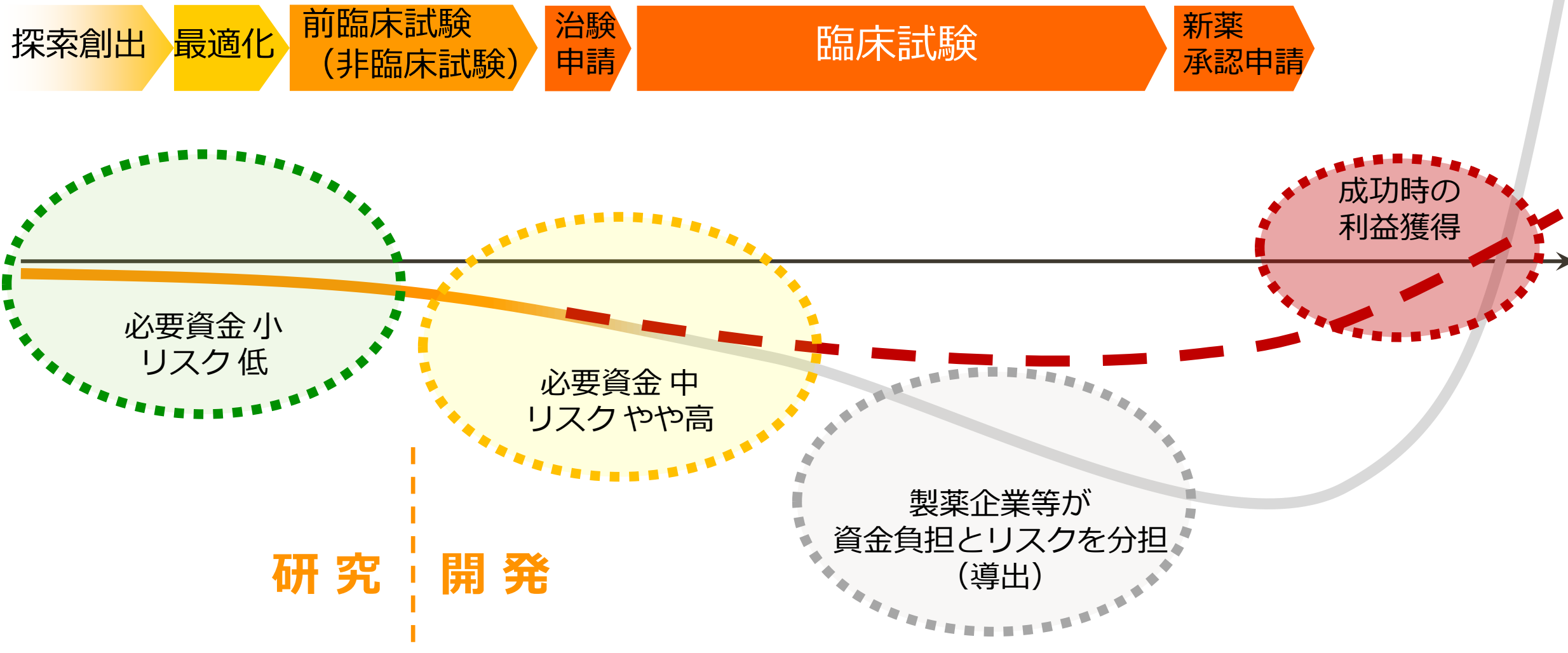
創薬・製薬の流れ



研究開発の流れとキャッシュフロー（模式図）



■ 高負担・高リスクの回避と引き換えに成功時利益をシェア



創薬企業の2つの事業モデル

*二者択一ではなく、それぞれに多様なバリエーションがあります。

研究開発投資のキャッシュフロー（模式図）

創薬パイプライン型
(自社で承認近くまで開発)

創薬基盤技術型
(比較的早期に製薬企業等へ導出)

☒ ポジティブ面

- 後期開発リスク（資金調達含む）を導出先に転嫁
- 一時金・マイルストーンで早めの収益が実現

☒ ネガティブ面

- 開発進行の主導権が導出先へ移行
- 利益分配への発言機会小 = 獲得機会・比率の毀損

☒ ポジティブ面

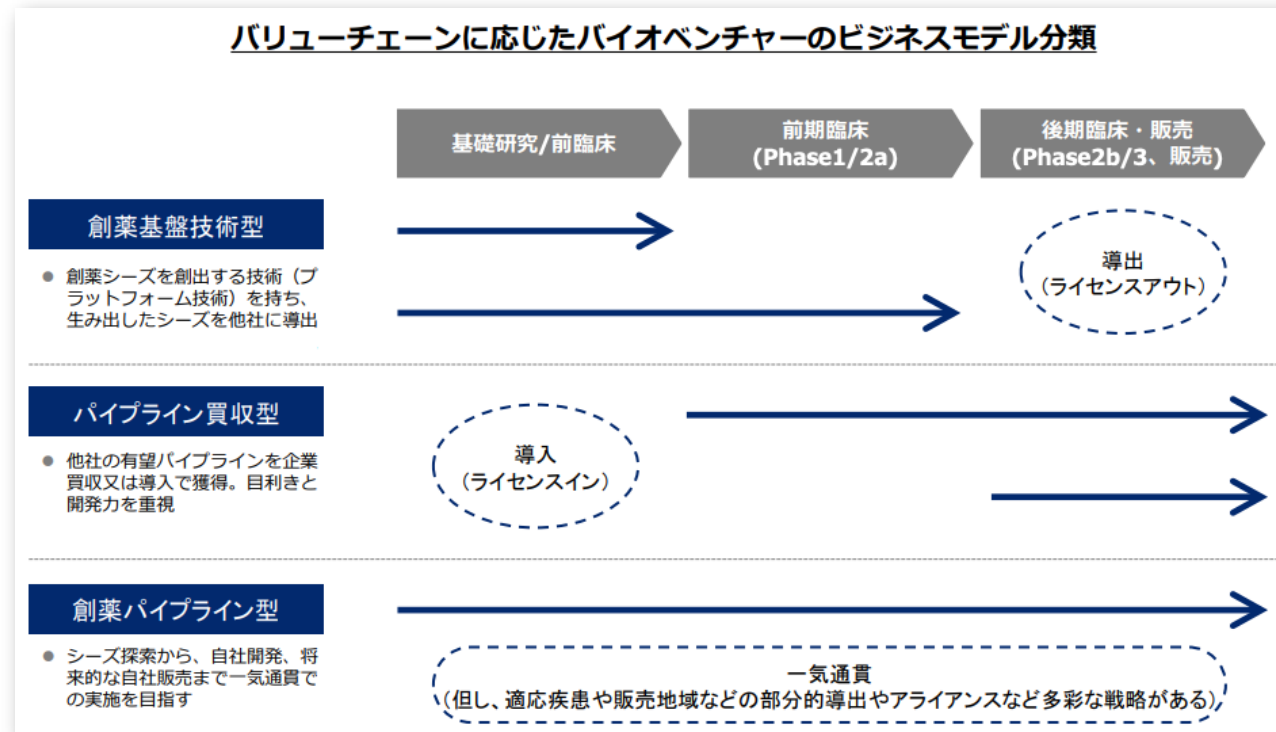
- 化合物を最も知る自社が**開発の主導権**を掌握
- 利益分配への発言機会大 = **リターンの最大化**

☒ ネガティブ面

- 後期開発に伴うリスク（資金調達含む）の保有
- 一時金など収益実現までの期間が長期化

探索から開発、承認・市販まで自社実施を目指すビジネスモデル

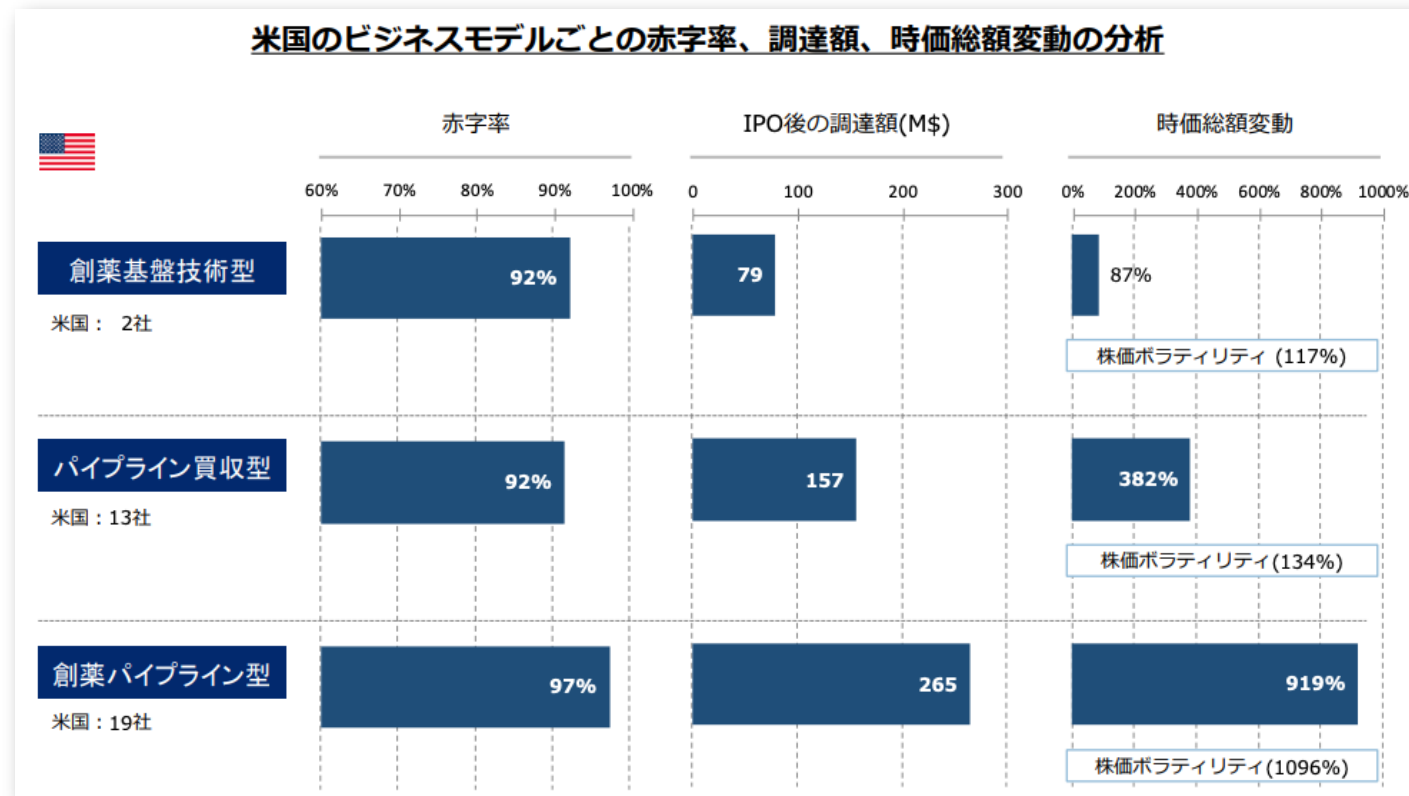
- 基礎研究（探索創出・最適化）→前臨床→早期臨床→後期臨床を一気通貫
 - ✓ ただし、適応や地域などの部分的導出やアライアンスなど多彩な戦略を並行できる
 - ✓ 1社が1つのビジネスモデルのみに分類されるわけではなく、開発品ごとや企業の成長段階に応じて、ビジネスモデルを柔軟に変化させることが可能



先行する米国は「創薬パイプライン型」が大きく成長

➤ 赤字であっても中長期的な企業価値向上が可能

”米国では、研究開発投資先行の創薬パイプライン型が評価される。
創薬基盤技術提供型は自らのアセットの切り売りとも捉えられる。
投資家も将来の成長可能性を見込んで創薬パイプライン型への投資を実行する”（米国ベンチャーキャピタル）



■免疫系抗がん剤の基礎研究・創出から後期臨床開発まで、自社で進めた実績があります

■これを活かし、**各パイプラインの特徴に沿った柔軟な開発方針**を想定しています

- 開発パイプラインごとの開発段階・成功確率・費用見込などに沿って使い分け、中長期的な企業価値の効果的な最大化を図ることが可能です。

■各パイプラインの現状の想定と今後

- **CBP501**：自社で承認まで開発する**創薬パイプライン型開発**を想定

並行して、適応や地域などの部分的導出やアライアンスなども選択肢にできる状況です。

- **CBS9106**：**創薬基盤技術型開発**で、前臨床試験段階で導出しました。

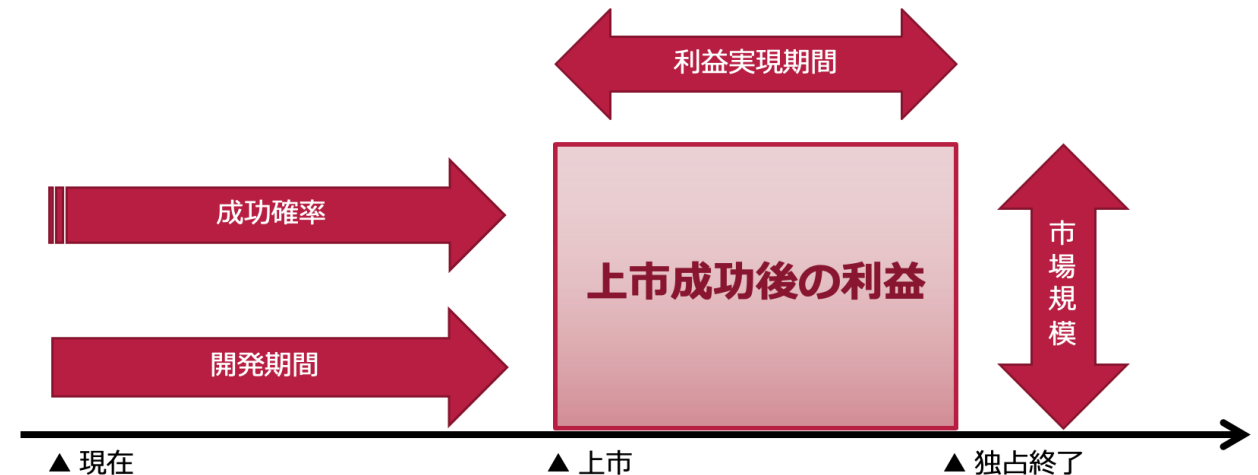
2025年6月に全権利の返還を受け、今後は追加で実施する基礎研究の成果等を勘案して開発方針を検討していきます。

- **CBT005**など後続のパイプライン候補も基礎研究の成果として生み出されており、それぞれの特徴に沿った開発方針を検討していきます。

創薬企業の価値 ÷ 開発パイプライン価値の総和

➤ 開発パイプライン価値の検討要素

- ✓ 開発パイプラインの成功（上市）可能性
- ✓ 成功までの時間軸
- ✓ 上市後の市場規模
- ✓ 競合状況
- ✓ 独占期間 . . .



創薬企業の本質的な事業は、上記のひとつひとつを改善し、

中長期的な企業価値を最大化すること = **開発の進捗**

開発パイプラインの状況

免疫着火剤 CBP501

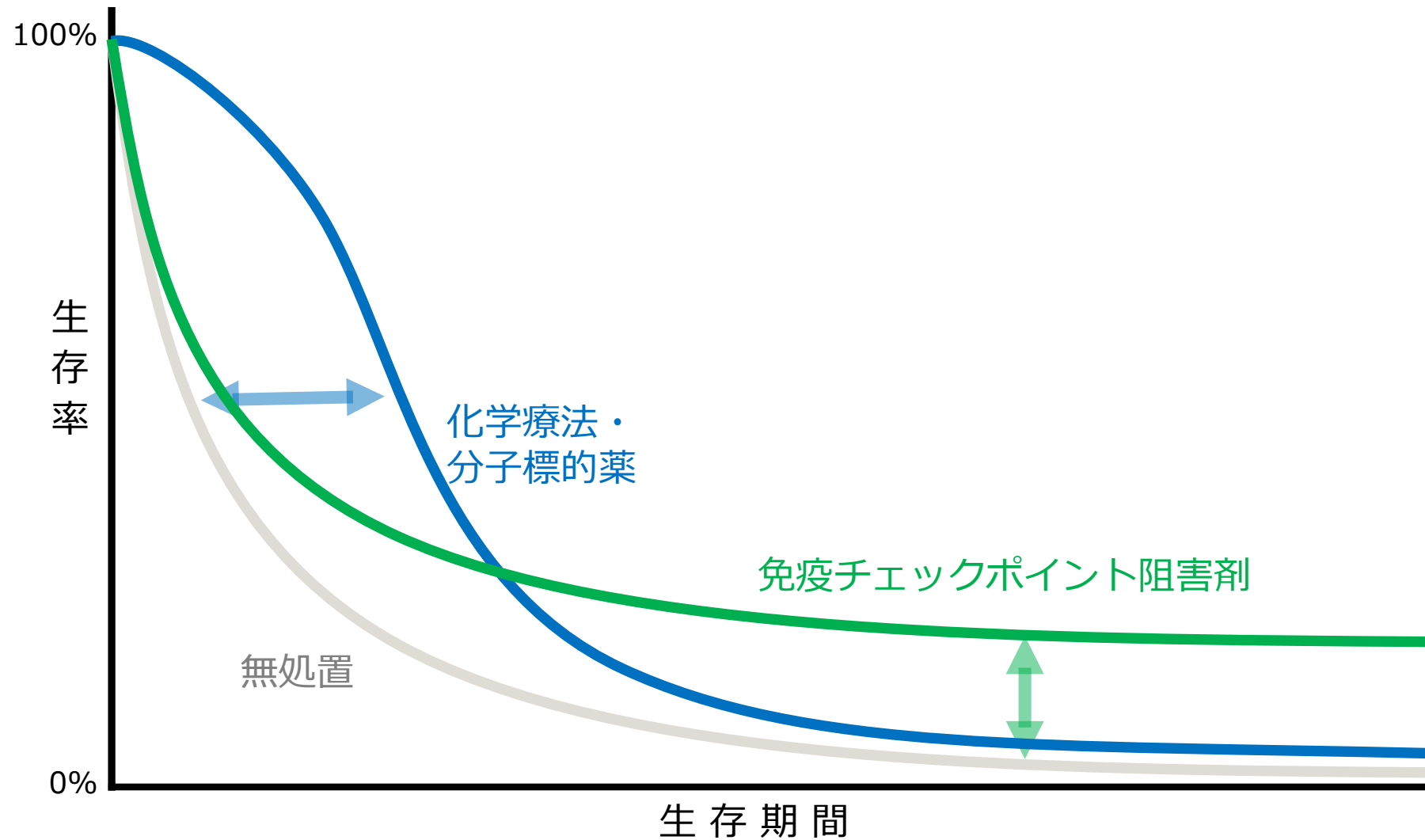
- 臨床第2相試験（膵臓がん3次治療）：**主要評価項目達成し早期終了。第3相試験へ**
- 欧州臨床腫瘍学会（ESMO）で臨床第2相試験結果を発表（2023年10月）
- 米国FDAとの協議の結果、臨床第2b相試験開始承認を受領（2024年2月）
- 米国臨床第2b相試験準備を整えつつ、**欧州臨床第3相試験を計画**（2024年2月）
 - ✓ 欧州臨床第3相試験開始に向け規制当局EMAへ臨床試験開始申請
 - ✓ EMAからオーファンドラッグ指定を受領（2024年8月）
- 欧州第3相試験成功時にはその結果をもとに**米国でも追加試験なく新薬承認申請を目指す**

可逆的XPO1阻害剤 CBS9106 (Felezonexor)

- 提携先Stemline社による米国臨床第1相試験完了（2022年2月）
- Stemline社との提携解消・全権利返還（2025年6月）

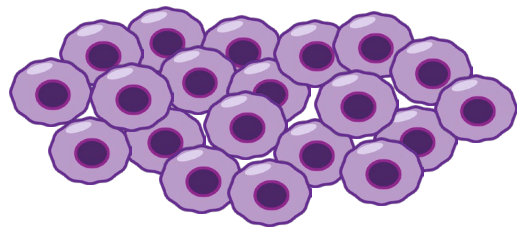
免疫着火剂 CBP501

免疫系抗がん剤は一部の患者様に劇的に効く



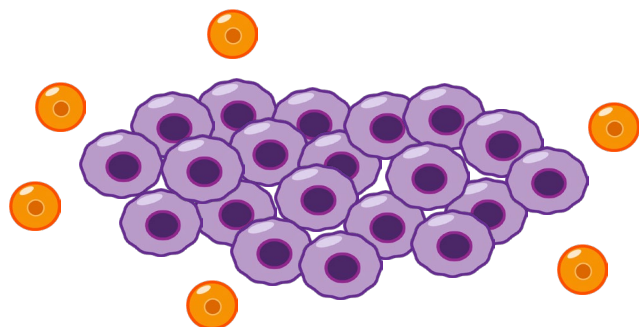
攻撃するための
T細胞がない

免疫砂漠



T細胞ががん組織に
入り込めていない

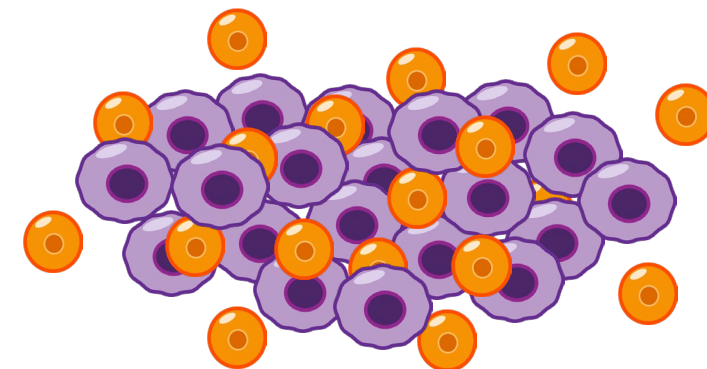
免疫排除



免疫コールドながんを
免疫ホットながんに
変えることが必要

T細胞が十分いて
がんを攻撃できる

免疫ホット

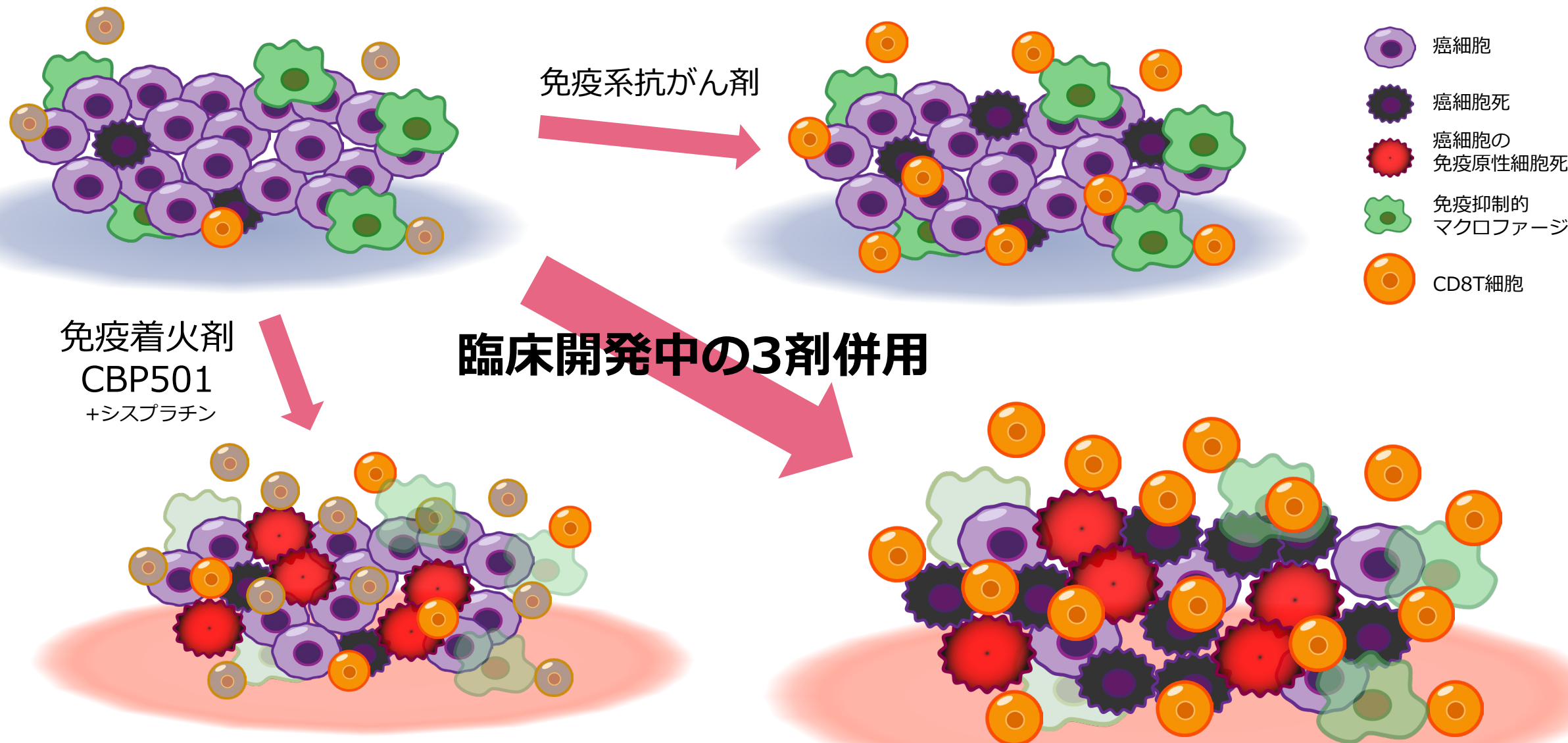


癌細胞

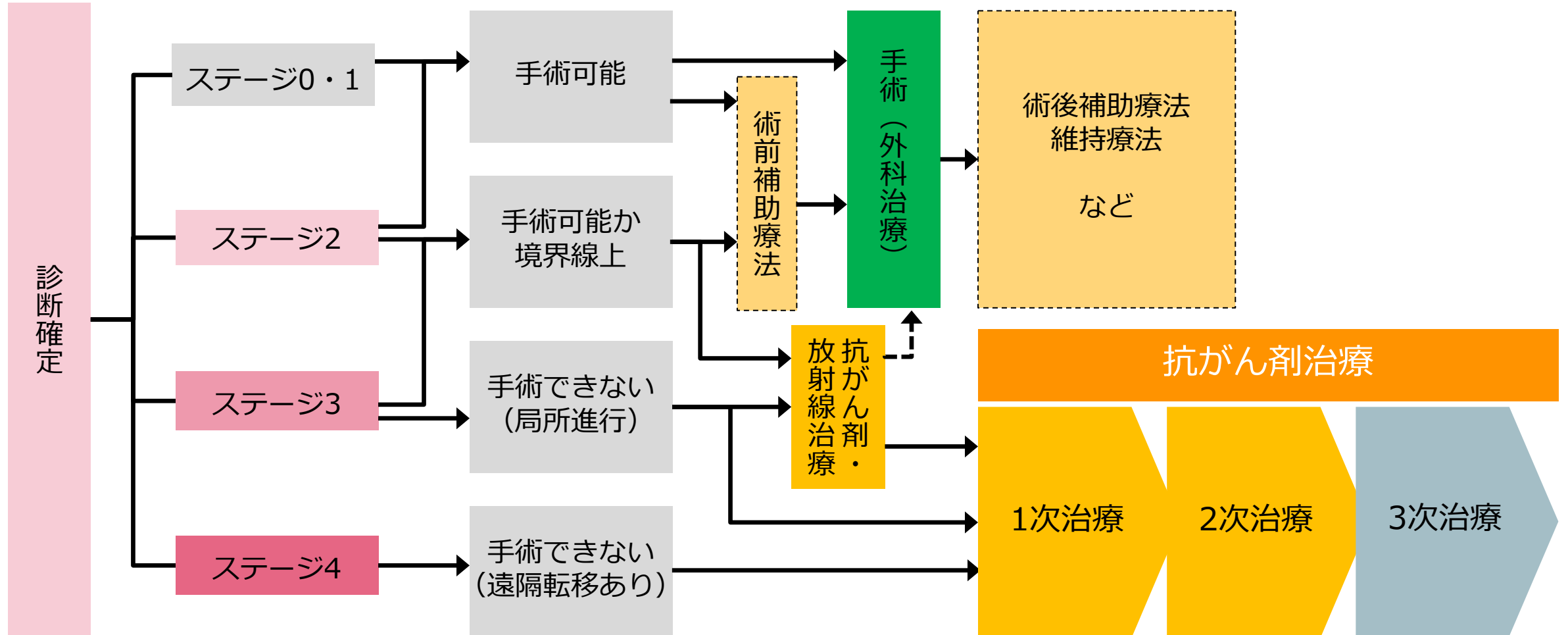


CD8T細胞

CBP501の3剤併用で免疫系抗がん剤を効きやすくする



診断ステージと治療の選択フロー (概略図*)



* 一般的な概略を示したものです。具体的な診療及び治療の選択にあたっては、主治医を含む医療チームやがん支援相談センターにご相談ください。

2次治療を終えた以降に有効な薬剤がなく、新薬の登場が切望されている



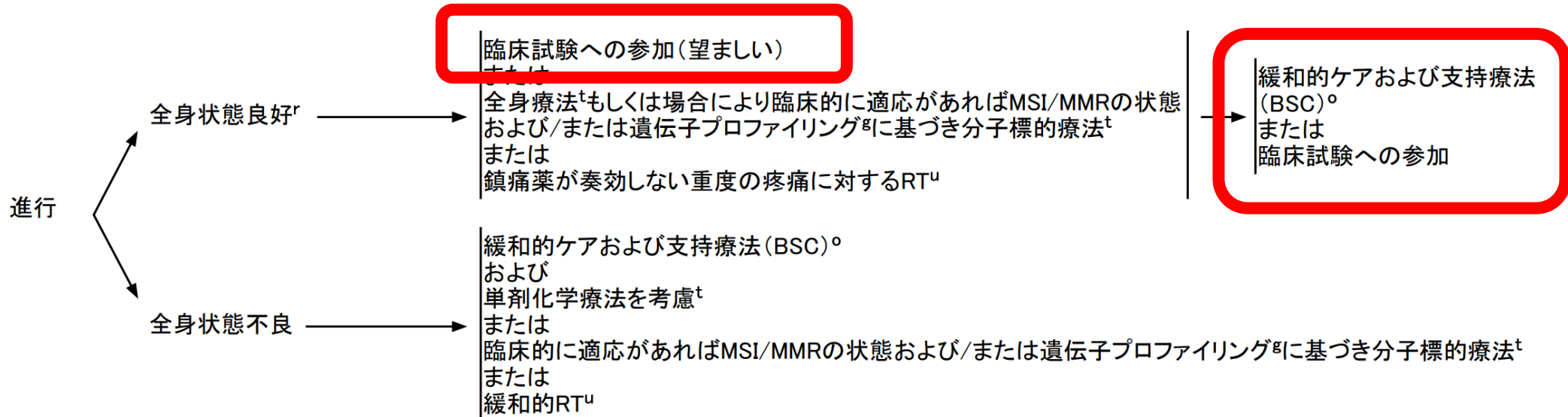
National
Comprehensive
Cancer
Network®

NCCN Guidelines Version 2.2021 膵癌（腺癌）

[ガイドライン索引](#)
[目次](#)
[考察](#)

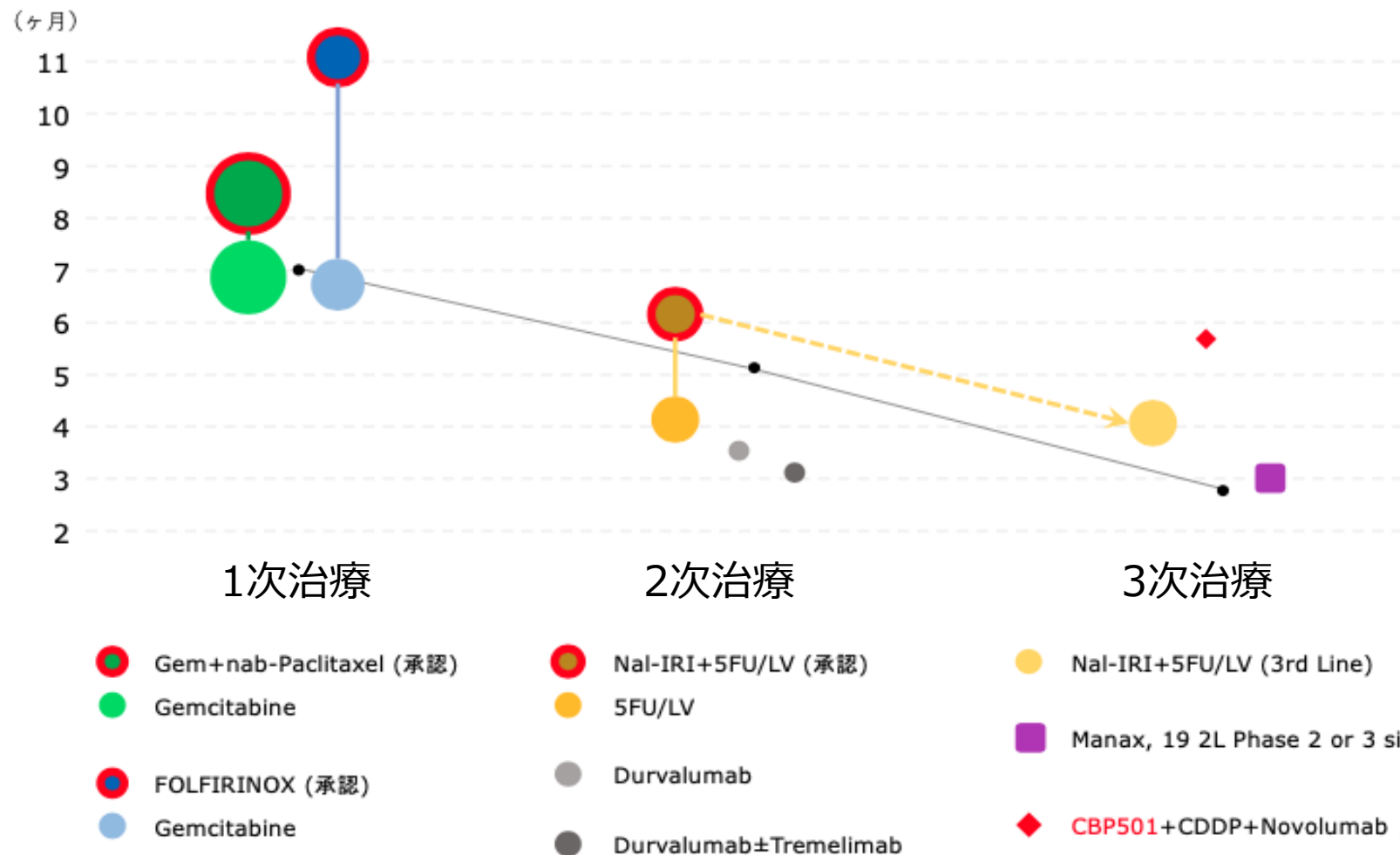
進行

二次以降の治療^s



CBPフェーズ1b試験のデータ（膵臓がん）

CBP501フェーズ1b試験中間解析 同種の膵臓癌臨床試験結果との比較（全生存期間）



CBP501フェーズ1b試験の中間解析結果を、比較に適すると考えられる他の臨床試験で示された全生存期間（OS）との比較で図示したもの。

詳細説明はブログ
<https://www.canbas.co.jp/20200514/>
をご参照ください。

CBP501 臨床第2相試験の有望な結果

ポスター発表されたCBP501臨床第2相試験結果

➤ 主要評価項目 3ヶ月無増悪生存率

✓ 第1群（3剤併用・CBP501 25mg）第2群（3剤併用・CBP501 16mg）で達成

✓ 良好な結果を受け、安全性モニタリング委員会はステージ2に進まないことを推奨

➤ 副次的評価項目（無増悪生存・客観的奏効率・病勢コントロール率・奏効期間・全生存・安全性）

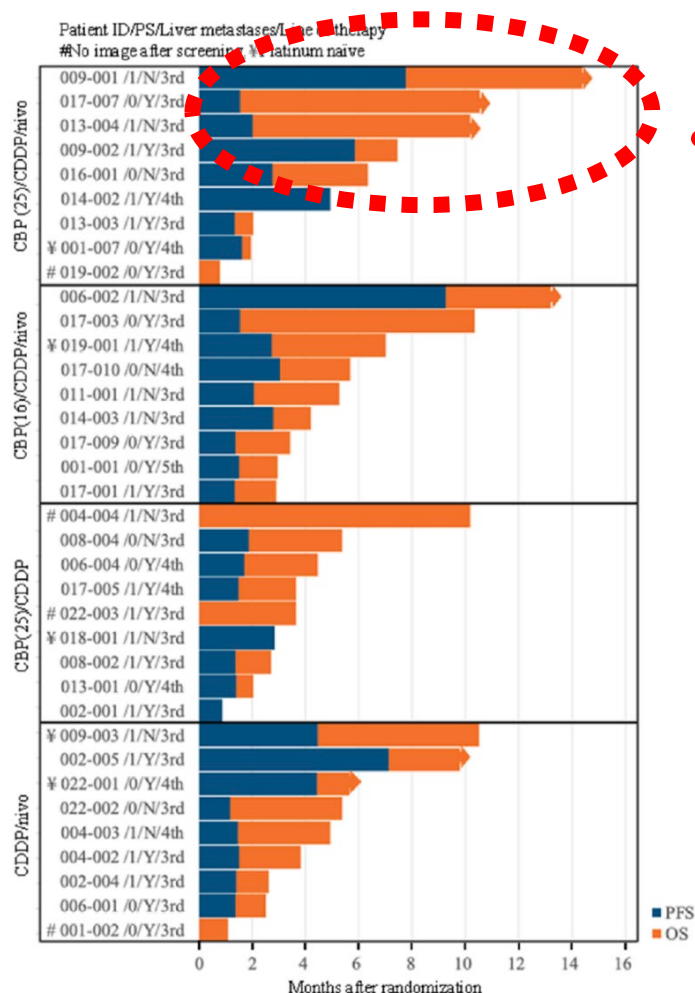
✓ これらに関する解説は[当社ブログ記事](#)（2023年10月24日）をご参照ください

➤ 結論

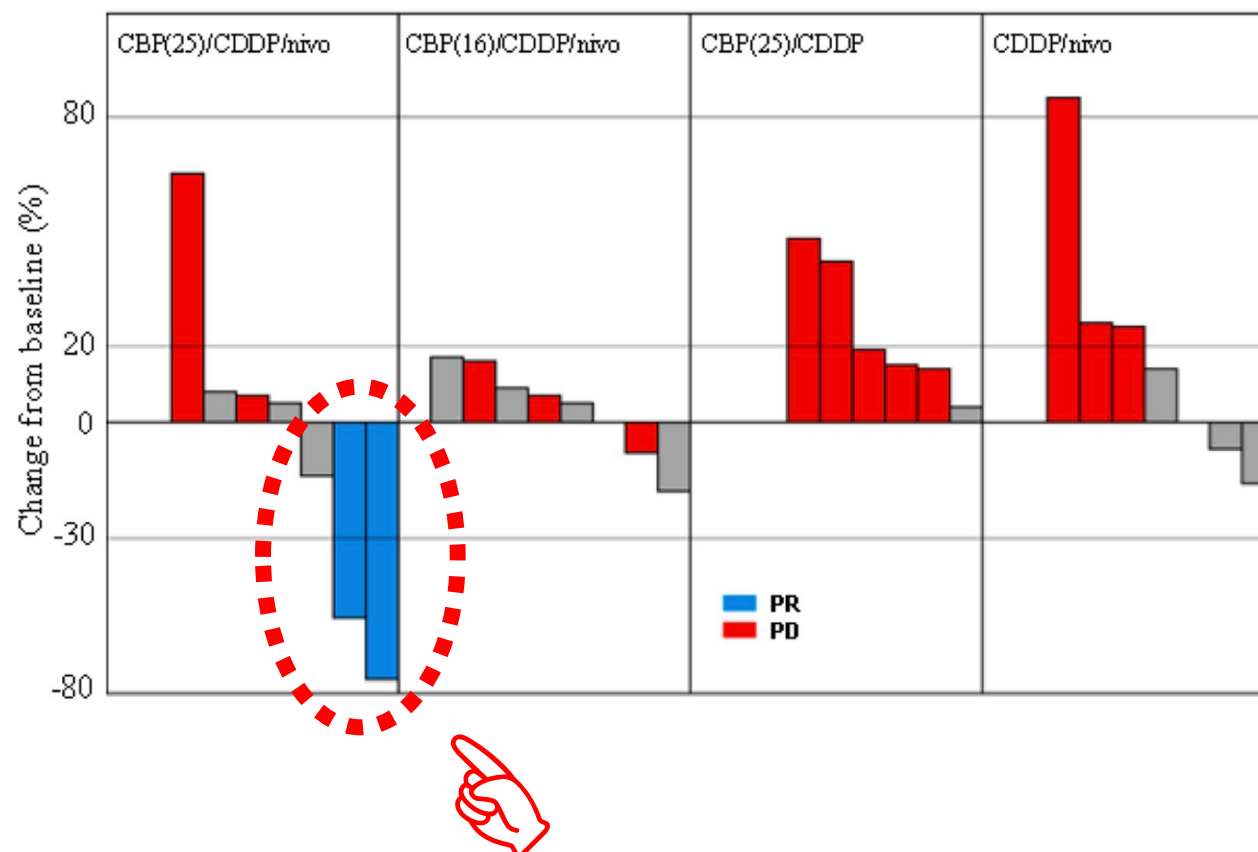
CBP501・シスプラチン・ニボルマブの併用療法は、転移性膵臓腺がんに対する3次治療として、**忍容性のある安全性**で、3ヶ月無増悪生存率、無増悪生存期間および全生存期間において、**持続的な奏効**と**臨床的に意義のある改善**をもたらした。この化学免疫併用療法は、さらなる検討を進めるべきであ

腫瘍増大のない生存期間(PFS)の伸長、生存期間(OS)の伸長、腫瘍サイズの縮小

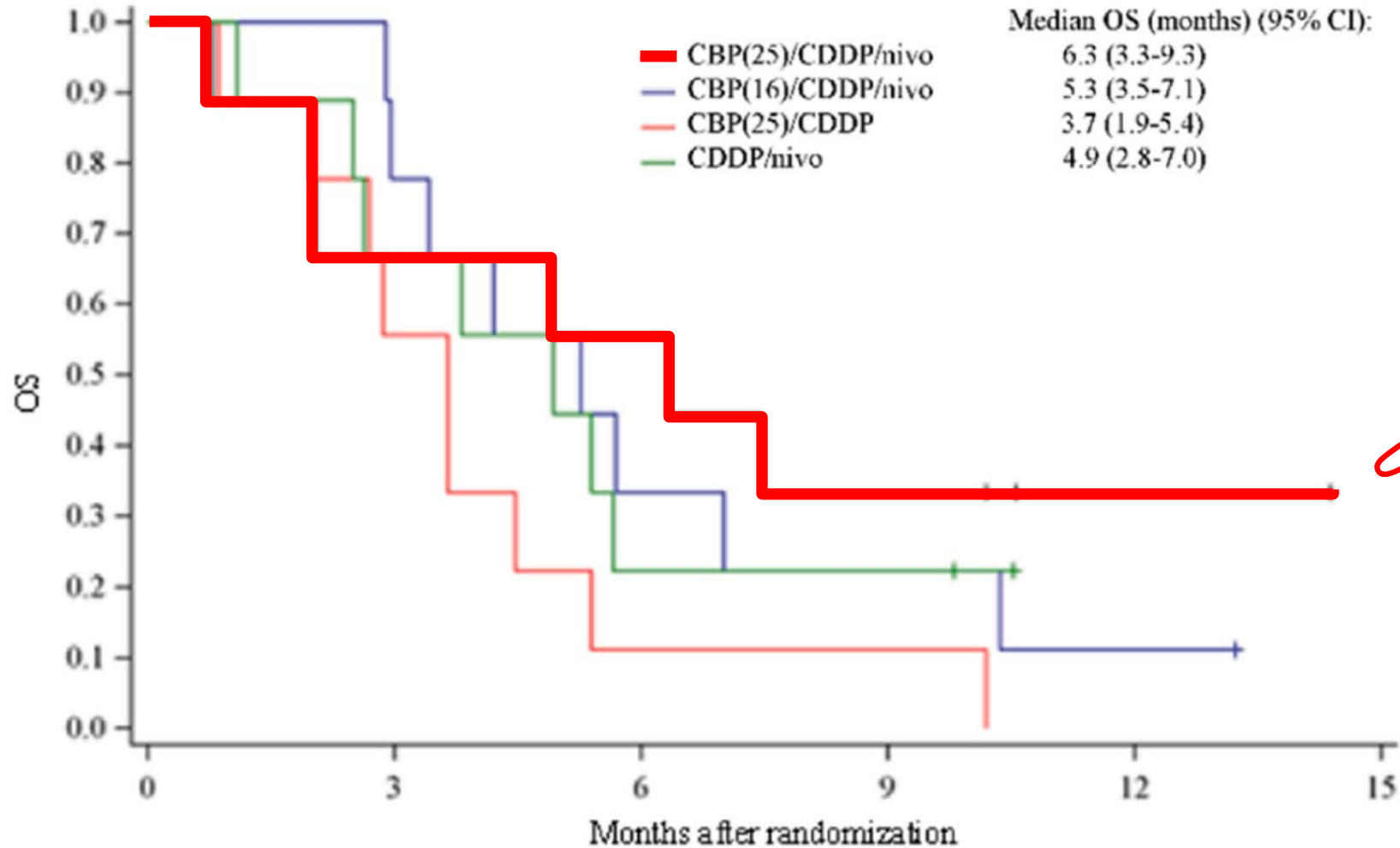
■ PFSとOSを示すスイマープロット図



■ 腫瘍の増大/縮小を示すウォーターフォール図



免疫チェックポイント抗体+ α ならではの特徴を示した生存曲線



足もとのトピック

CBP501 欧州臨床第3相試験申請

欧州臨床第3相試験開始申請と準備の状況

➤ ふたつの不確実性の現状

- ✓ **開始承認獲得の不確実性**：顕在化のおそれは着実に低下
- ✓ **獲得時期の不確実性**：当社でコントロール不能な不確実性が現在も存在
 - ・ 薬剤製造に関連する欧州規制対応、当局による確認など
- ✓ 開始承認受領後に試験を円滑・迅速に開始するための準備も継続、進展続く
 - ・ 臨床試験実施施設との連携、欧州規制当局との相互理解の進行など
- ✓ **時期以外**でも状況が悪化すれば米国試験への移行を検討するが**現状その兆候なし**

➤ 臨床第3相試験費用見通し

- ✓ 45-50億円の見通しに現時点で変更なし
 - ・ 一部は申請準備の中で先行支出済み

CBP501

パイプライン価値試算のめやす

CBP501のパイプライン現在価値

➤ 利益実現までの開発期間・成功確率・不確実性

✓ CBP501臨床第3相試験を完遂できるか

- 欧州臨床試験開始承認獲得の期待（獲得時期/それ以外の不確実性）
- 期間見通し、成功確率、開発環境や開発資金の確保

✓ 新薬承認を獲得できるか

- これまでの良好な臨床試験データ

➤ CBP501上市成功後の利益

✓ 上市成功時の成功規模

- 欧州ほか主要市場の患者数・薬価・シェア、他のがんへの適応拡大の期待
- オーフアン指定による欧州10年・米国7年の独占保護



後続パイプラインと、今後も継続的に新薬候補を創出する体制の価値

一般的なパイプライン価値試算の考え方

- ✓ 一般に現在価値は、将来の一定期間の純利益やキャッシュフローを、投資家の想定する割引率で割り戻して算出します。
- ✓ この資料の市場・末端販売高・ロイヤルティの想定等は、上記の方法で試算していただくためのめやすとしてお示ししているものです。
- 創薬パイプライン価値の試算にあたっては、成功確率、成功までに要する期間、必要な投資額（臨床試験費用）等にご留意いただく必要があります。

CBP501の想定市場

- ベストシナリオにおいては、欧州臨床第3相試験の結果をもとに欧州だけでなく米国にも同時申請を想定しています。
このため、本資料におけるCBP501の想定市場は米国を併記しています。

膵臓がん**3次治療領域**におけるCBP501の位置

- 既存先行品は市場に存在しない = **市場がまだない**
 - ✓ 積み上げによる市場規模想定が必要
- 競合の開発中止が続き、CBP501は依然トップランナーの位置にいる

膵臓がん治療開発**全体**におけるCBP501の位置

- **2次治療**を対象に新薬ダラクソンラシブが開発中。きわめて良好な成果を示す
 - ✓ 耐性ができる課題は解決されていない → 3次治療の対象となる患者数の増加が期待される
 - ✓ 2次治療の標準となった場合には、3次治療は既存1次・2次承認薬との競争に変化も
 - ✓ 並行して公表された3次治療データ：
CBP501との比較は難しいが、現時点では「どちらもそれぞれ良さそうな兆候」と言える

CBP501米国上市後の市場規模（一般的な検討要素をもとに当社試算）

➤ 米国市場でピーク時9億ドルと推定

膵臓癌 3次治療 米国患者数	年間4.7万人以上 ^{*1}
×	
薬物治療を選択する患者の割合	20%～70% ^{*2}
×	
来院しない患者を考慮	80%程度が来院を継続 ^{*3}
×	
CBP501の獲得するシェア	ピーク時のシェア60% ^{*4}
×	
投与期間	4カ月以上 ^{*5}
×	
ひと月の薬剤費	2万ドル前後 ^{*6} （オニバイドを参考）

^{*1} The International Agency for Research on Cancer(IARC), GLOBOCAN2018

^{*2} Anticancer Research, 2007; 27(4A):1789-1794
Oncologist, 2017; 22:925-933
Cancer Res Clin Oncol, 2019; 145: 445-455
Cancer Med, 2020; 9:8480-8490

^{*3} J Clin Oncol, 2010; 28:2381-2388

^{*4} 他の抗がん剤のピーク時シェアを参考に自社想定

^{*5} Therapeutics and Clinical Risk Management, 2018; 14:1691-1700 およびCBP501のP1b臨床試験結果から自社推計

^{*6} 膵臓がん3 次治療に対する標準薬剤は存在しないため、直近で膵臓がん領域で新薬承認された2次治療の薬剤であるオニバイドを参考薬剤として自社推計に使用。
厚生労働省中央社会保険医療協議会総会2020年5月13日資料のオニバイドの数値とAmerican Society of Health-System Pharmacists (ASHP)
「2週間に1回投与・1回あたり薬剤費10,000ドル前後」

CBP501欧州上市後の市場規模（一般的な検討要素をもとに当社試算）

➤ 欧州（英国含む）市場でピーク時5.5～9億ユーロと推定

膵臓がん3次治療 患者数	年間6～10万人推定*1
×	
薬物治療を選択する患者の割合	20%～70%*2
×	
来院しない患者を考慮	80%程度が来院を継続*3
×	
CBP501の獲得するシェア	ピーク時のシェア60%*4
×	
投与期間	4カ月以上*5
×	
ひと月の薬剤費	0.9～1万ユーロ*6

*1 ECIS(European Cancer Information System) Globocan 2022 data (EU27カ国、2022年)の膵臓がん罹患患者数・死亡者数をもとに3次治療患者数を当社推定。出典・推定時期・推定方法が異なるため、p.43とは一致しないことに留意

*2 Anticancer Research, 2007; 27(4A):1789-1794
Oncologist, 2017; 22:925-933
Cancer Res Clin Oncol, 2019; 145: 445-455
Cancer Med, 2020; 9:8480-8490

*3 J Clin Oncol, 2010; 28:2381-2388

*4 他の抗がん剤のピーク時シェアを参考に当社推定

*5 Therapeutics and Clinical Risk Management, 2018; 14:1691-1700 およびCBP501のP1b臨床試験結果から当社推定

*6 膵臓がん3次治療に対する標準薬剤は存在しないため、直近で膵臓がん領域で新薬承認された2次治療の薬剤であるオニバイドを参考薬剤とし、同薬剤のEU・英国それぞれのインターネット販売価格をもとに、“2週間に1回投与・1回あたり薬剤費4,500～5,000ユーロ”と当社推定

CBP501のパイプライン価値 (4) 将来の対象拡大

初期適応は小さいものの長期的な投与対象患者数（適応・地域拡大後）は大きく、
日米欧で年間50万人以上を対象にできる可能性も

→ 地域の拡大

	米国	欧州	日本	アジア	南米など
膵臓がん 3次治療	4.7万人	3万人以上	3.7万人	11万人 (中国のみ)	
膵臓がん 1次～2次治療	5万人以上	4万人以上	4.3万人	11万人 (同上)	
大腸がん	10万人のうち PD-1不能例など	2万人以上	5万人のうち PD-1不能例など	14万人のうち PD-1不能例など	
肺がん	22万人のうち PD-1不能例など	5万人以上	11万人のうち PD-1不能例など	77万人のうち PD-1不能例など	
悪性胸膜中皮腫 など					

↓
適応の
拡大

CBP501のパイプライン価値試算のめやす

➤ 上市後一定期間の末端販売高の推移想定

(単位：億ドル)

	2027+X(Y1)	Y2	Y3	Y4	Y5	Y6
末端販売高	4.0	5.0	5.7	6.2	7.0	7.5

※目標シナリオでの上市（2027年）からX年経過し、市場浸透が進むもののピークには未だ達しない6年間で想定したものです。

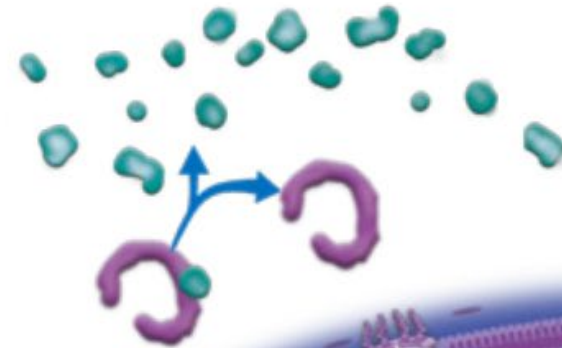
➤ ロイヤルティ

	Y5	ピーク時
ロイヤルティ%	開発最終段階での提携。40～80%を目指す	
ロイヤルティ収入	2.8～5.6	3.6～7.2

※開発最終段階で米国において提携先に販売委託、ロイヤリティ収入・現金収入の獲得を想定したものです。
※適応や地域などの部分的導出や、原薬・最終製剤を提供するなどの付与契約等によっても変動の可能性があります。

可逆的XPO1阻害剤 CBS9106

XPO1による核外排出



核膜孔
複合体
(出入り口)

XPO1 (exportin 1)

XPO1は、がん抑制因子、細胞周期阻害因子、転写因子など、がん細胞にとって都合の悪いさまざまな蛋白質を核外へ運び出しています

Felezonexor (CBS9106) によるXPO1阻害

Felezonexorは、がん細胞の細胞周期停止とアポトーシスを誘導することが示されており、固形がんおよび血液がんに対する傷害性を有します

Felezonexor

核内の
蛋白質と
XPO1の
結合を
ブロック

Felezonexorは、XPO1による核外排出を可逆的に阻害する低分子化合物です

臨床第1相試験を有望なデータとともに終了

「安全性」「有効性」「使いやすさ」でXPO1阻害剤のベスト・イン・クラスへ

➤ 上市済みのXPO1阻害剤：XPOVIO(Selinexor) 米国Karyopharm社

適応：びまん性大細胞B細胞性リンパ腫・多発性骨髄腫

✓ XPOVIOは副作用が多く、適応も血液癌の一部に限られている

直近の臨床試験（STORM study、多発性骨髄腫対象）

・・・89%の患者でグレード3以上の重篤な副作用報告、少なくとも2例の死亡報告

➤ CBS9106の優位性

✓ 安全性：最大耐用量の高さ（Stemline社による臨床第1相試験、ESMO2020報告）

・・・背景には、CBS9106のXPO1分解作用* による副作用の小ささ

✓ 有効性：複数の固形がんで薬効の兆候（Stemline社による臨床第1相試験、ESMO2020報告）

✓ 使いやすさ：臨床現場で使いやすい経口剤

* CBS9106は、XPO1による基質輸送を阻害したあと、XPO1を分解することがわかっており、細胞は新たなXPO1を産生して正常な機能を保とうとするため、副作用の小ささが期待できる。

Stemline社とのライセンス契約経過

- 2014年12月 日中台韓を除く全世界を対象にライセンス導出
- 2018年8月 ライセンス対象地域を上記地域を含む全世界へ拡大
- 2025年6月 ライセンス契約を解消し、開発及び商品化に関するすべての権利が当社に返還

ライセンス契約に基づき受領済みの収益

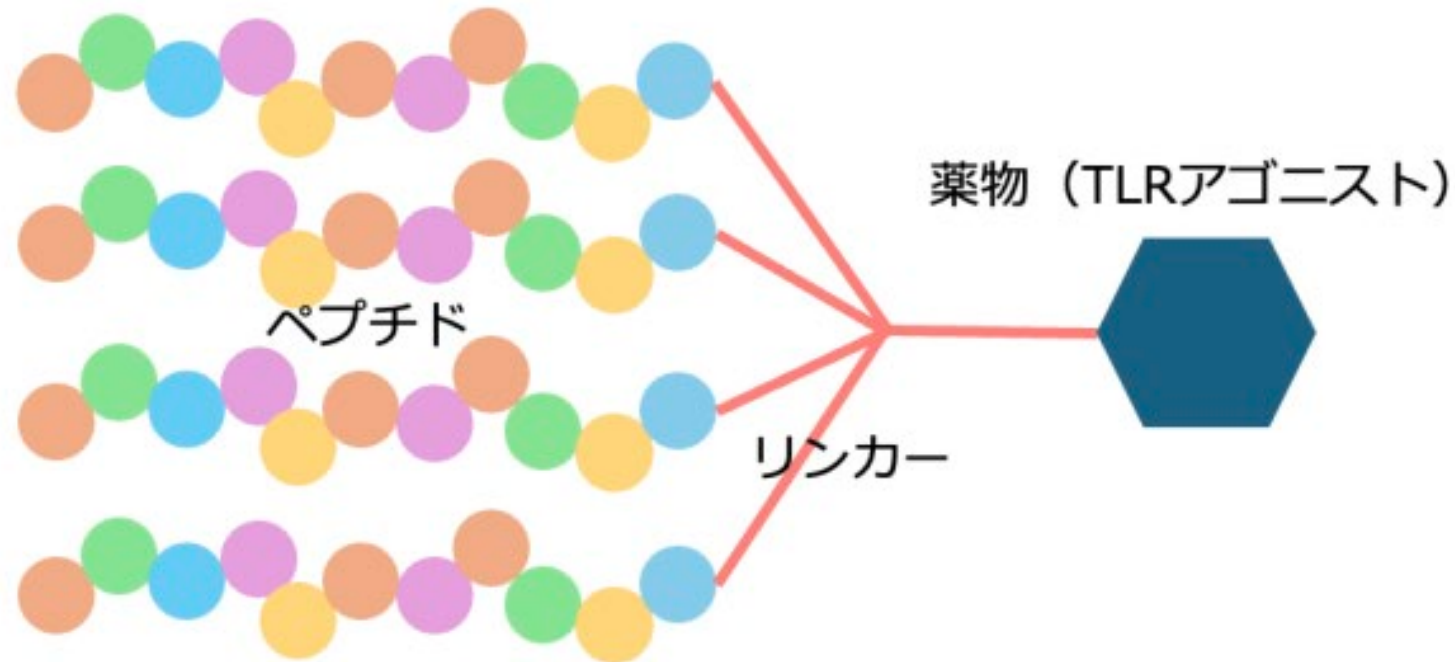
- 契約一時金・・・2014年12月 10百万円、2018年8月 5百万円 それぞれ受領済
- 技術アドバイザリーフィー・・・2014年12月～2021年6月 累計702百万円 受領済

今後の展開

- 返還手続き終了後、当社は具体的な臨床開発計画を策定するための基礎研究を実施
(基礎研究費予算の範囲で実施するので短期的な業績への影響なし)
- 今後、追加で実施する基礎研究の成果や会社の財務状況などを勘案して、開発方針を検討

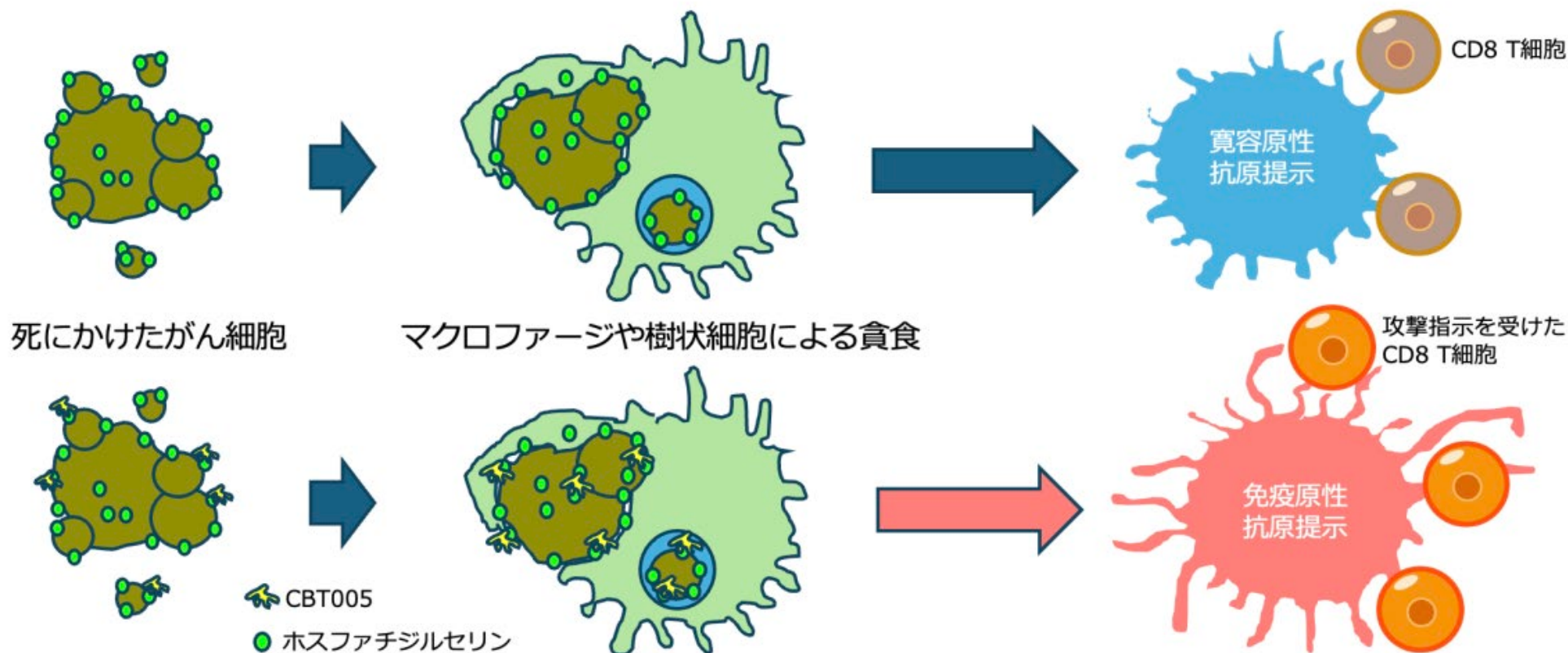
免疫スイッチ作動薬 CBT005

- ホスファチジルセリンに結合するペプチド4つと薬物をリンカーで結合させた**PDC** (Peptide-Drug Conjugate)
 - 狙い：死にかけたがん細胞の新生抗原を利用して免疫スイッチを切替える
 - 模式図



免疫スイッチ (ImmunoSwitch)

- 抗原提示細胞のTLRを活性化し、T細胞への指示を「**攻撃する**」に切替える
《想定している作用機序》



その他の研究開発 前臨床試験までの段階のプロジェクト

基礎研究～前臨床試験準備段階のパイプライン (ピックアップ)

➤ IDO/TDO二重阻害剤

- ✓ 静岡県立大学と共同研究で最適化を進行中。日本・米国で特許成立 (2023年6月6日・2024年9月10日公表)
- ✓ ファルマバレーセンターによるアライアンス活動開始 (2025年4月2日公表)

➤ CBP-A08

- ✓ 最適化を完了し、財務状況等を勘案し前臨床試験開始を模索

➤ NEXTプロジェクト

- ✓ 新たなコンセプトの免疫系抗がん剤候補化合物の探索創出
- ✓ インテージヘルスケアとAI（人工知能）を利用した創薬共同研究 (2024年12月25日公表)

➤ 抗がん剤感受性予測システム

論文・学会発表

CBP501

➤ 臨床第2相試験データ = 臨床試験継続価値の根拠

"Multicenter, randomized, parallel group, phase II study to establish the efficacy and safety of CBP501, cisplatin, and nivolumab for $\geq$ third-line treatment of patients with exocrine pancreatic cancer and WBC $<10,000/\text{mm}^3$ " - ESMO 2023, Poster 1625P

➤ 臨床1b相試験中間解析結果 = 免疫コールドながんを免疫ホットにする「免疫着火剤」の証明（ヒトでの証明）

"Phase Ib clinical study of CBP501, cisplatin, and nivolumab administered every 3 weeks in patients with advanced refractory tumors. Efficacy in dose-escalation and expansion cohorts." - ASCO 2020; Session Developmental Therapeutics - Immunotherapy

➤ 白血球異常値以外の癌患者において高い有効性を示すことの証明

"Observed separation of survival curves by WBC in CBP501-treated patients leads to experimental identification of macrophage functions suppressed by CBP501." - AACR-NCI-EORTC International Conference on Molecular Targets and Cancer Therapeutics 2015

➤ 免疫コールドながんを免疫ホットにする「免疫着火剤」であることの証明（動物実験）

"CBP501 induces tumor immunogenic cell death and CD8 T cell infiltration into tumor in combination with platinum, thereby increasing the efficacy of immune checkpoint inhibitors against tumors in mice." - AACR 2016

"CBP501 potentiates the appearance of cisplatin induced indicators of immunogenic cell death and promotes antitumor effects in an immunocompetent mouse model." - AACR-NCI-EORTC International Conference on Molecular Targets and Cancer Therapeutics 2015

➤ 作用メカニズム解析

"CBP501 inhibits EGF-dependent cell migration, invasion and epithelial-to-mesenchymal transition of non-small cell lung cancer cells by blocking KRas to Calmodulin binding." - Oncotarget 2017; 8(43):74006-74018

"CBP501 suppresses cell migration, invasion and epithelial-mesenchymal transition (EMT) in non-small cell lung carcinoma." - AACR-NCI-EORTC International Conference on Molecular Targets and Cancer Therapeutics 2015

"CBP501-calmodulin binding contributes to sensitizing tumor cells to cisplatin and bleomycin." - Mol Cancer Ther 2011; 10:1929-1938

"Screening of a library of T7 phage-displayed peptides identifies alphaC helix in 14-3-3 protein as a CBP501-binding site." - Bioorg Med Chem 2011; 19:7049-7056

"Sensitization of cancer cells to DNA damage-induced cell death by specific cell cycle G2 checkpoint abrogation." - Cancer Res 1999; 59:5887-5891

➤ 創薬スクリーニング手法

"Cell cycle phenotype-based optimization of G2-abrogating peptides yields CBP501 with a unique mechanism of action at the G2 checkpoint." - Mol Cancer Ther 2007; 6:147-153

CBS9106

- **臨床第1相試験データ最新アップデート いくつかの固形癌において腫瘍サイズの縮小確認 = 臨床試験継続価値の根拠**
“[Updated Results of A Phase I Study of Felezonexor \(SL-801\), A Novel XPO-1 Reversible Inhibitor, In Patients With Relapsed/Refractory Solid Tumours/](#)” - ESMO 2020, POSTER 564
- **CBS9106が幅広い固形癌や血液癌に有効であることを示唆（基礎研究）**
“SL-801, a Novel, Reversible Inhibitor of Exportin-1 (XPO1) / Chromosome Region Maintenance-1(CRM1) with Broad and Potent Anti-Cancer Activity.” - ASH 2015, POSTER
- **CBS9106とStemline社の別の開発品SL-401との併用効果の示唆**
“SL-401, a Targeted Therapy Directed to the Interleukin-3 Receptor (CD123), and SL-801, a Reversible Inhibitor of Exportin-1 (XPO1), Display Synergistic Anti-Tumor Activity Against Hematologic Malignancies in Vitro.” - ASH 2016, CHEMICAL BIOLOGY AND EXPERIMENTAL THERAPEUTICS: POSTER III 802
- **作用メカニズム**
“CBS9106-induced CRM1 degradation is mediated by cullin ring ligase activity and the neddylation pathway.” - Mol Cancer Ther 2014; 13(12):3013-3023
“CBS9106 is a novel reversible oral CRM1 inhibitor with CRM1 degrading activity.” - Blood 2011; 118(14):3922-3931

特許

CBP501

- ペプチド及びペプチド模倣物の併用投与並びに癌患者の部分母集団に対する治療
(2014/207556(01579) 米国・欧州主要国*¹・日本で成立済)
 - ✓ 用途特許。白血球異常値を排除する禁忌記載による実質的な独占期間延長の根拠
- ペプチド及びペプチド模倣物並びにT細胞活性化及び/又は免疫チェックポイント阻害剤の併用による癌治療
(2017/069291(082500) 米国・欧州*² 日本で成立済)
 - ✓ 免疫チェックポイント阻害抗体との併用に関する用途特許

CBS9106

- DNA傷害を増強することによる抗癌活性をもつ化合物 (2009/031040(003636) 米国・欧州主要国*¹・日本で成立済)

CBT005

- ホスファチジルセリン複合体 (2023/126885(062902) 米国で成立済)

IDO/TDO阻害剤

- IDO/TDO阻害剤 (2019/078246 *³ 米国・日本で成立済)

*1 欧州主要国とは、欧州特許庁加盟国のうち当社の特許戦略上有意義と判断し得る国を指します。
具体的には、ドイツ、スイス、英国、フランス、ベルギー、イタリアなど。

*2 単一的効力を有する欧州特許（欧州単一効特許）として成立。
上記欧州主要国具体例のうち、スイス、英国は含まれません。

*3 当社と公益財団ふじのくに医療城下町推進機構の共有特許。

事業のリスクと対応策

※ 顕在化の可能性が比較的高いリスク、顕在化した場合に成長可能性への影響の大きいリスクを
有価証券報告書「事業等のリスク」から抜粋して掲載しています。
その他のリスクについては、有価証券報告書「事業等のリスク」をご参照ください。

創薬事業全般のリスク

➤ 医薬品開発の不確実性

- ✓ 多額の費用、期間、成功確率
- ✓ 複数の開発パイプラインそれぞれのバックアップを保有するなど分散対応

➤ 将来収益の不確実性

- ✓ 承認獲得の成功有無、さらに承認獲得したとしても十分な収益の得られない可能性
- ✓ 既承認薬剤の市場規模や実績をもとに採算見込を判断

➤ 将来の法的規制・医療保険制度等の不確実性

➤ 潜在的な競合

当社事業遂行上のリスク

➤ 開発資金の確保

- ✓ CBP501：資本市場からの資金調達による「創薬パイプライン型」開発を志向しつつ、必要に応じて提携パートナーの獲得も模索。資本市場からの資金調達には不確実性が伴う
- ✓ CBS9106：ライセンス返還を受け、新たな開発方針を今後検討

➤ 臨床試験データ

- ✓ 今後の臨床試験において有効性が確認されず、または安全上の重要な懸念が生じるおそれ
- ✓ 現時点ではCBP501・CBS9106ともに有望な有効性・安全性が示されていると判断

➤ 開発パイプラインの継続的拡充

- ✓ CBT005、CBP-A08、IDO/TDO二重阻害剤、NEXTプロジェクトなど
- ✓ 継続的な新薬候補創出が中長期的な企業価値の源泉であり、試行錯誤を継続

➤ 知的財産権

当社事業遂行上のリスク（続き）

➤ 財務状況

- ✓ 創業後現在までの収益は委託研究の対価及び提携に基づく収益のみであり、当社が開発した医薬品の売上による事業収益は未計上。先行開発投資期間であり、営業損失・経常損失を計上し、営業キャッシュ・フローのマイナスを財務キャッシュ・フローで補う財務状態が継続
- ✓ 当社事業の継続に懸念が生じる可能性があり、必要なタイミングでの資金確保に注力

➤ 潜在株式の顕在化（行使・転換）による当社株式数の増加

- ✓ 役職員向けストック・オプション、資金調達目的の転換社債・新株予約権

➤ 継続企業の前提に関する重要事象等

- ✓ 営業キャッシュ・フローの継続的マイナス
- ✓ 各化合物にかかる戦略提携を重要課題とし、収益の獲得に努める。その可能性と内容の最大化のためにも開発推進に注力

2026年6月期決算・財務の状況

2026年6月期損益計算書のポイント

➤ 事業収益計上なし

➤ CBP501臨床開発（主に臨床第3相試験開始申請と規制対応）を中心に研究開発先行投資

- ✓ 事業費用 1,358百万円の内訳：基礎研究費*1 226百万円 臨床開発費*2 830百万円 販管費 301百万円
基礎研究費と販管費は前年比微増。臨床開発費の大半はCBP501欧州臨床第3相試験の開始申請と規制対応に関連する費用で、特に製造製剤化に関する規制対応で支出増。
- ✓ 営業外損益（主に為替差益）50百万円

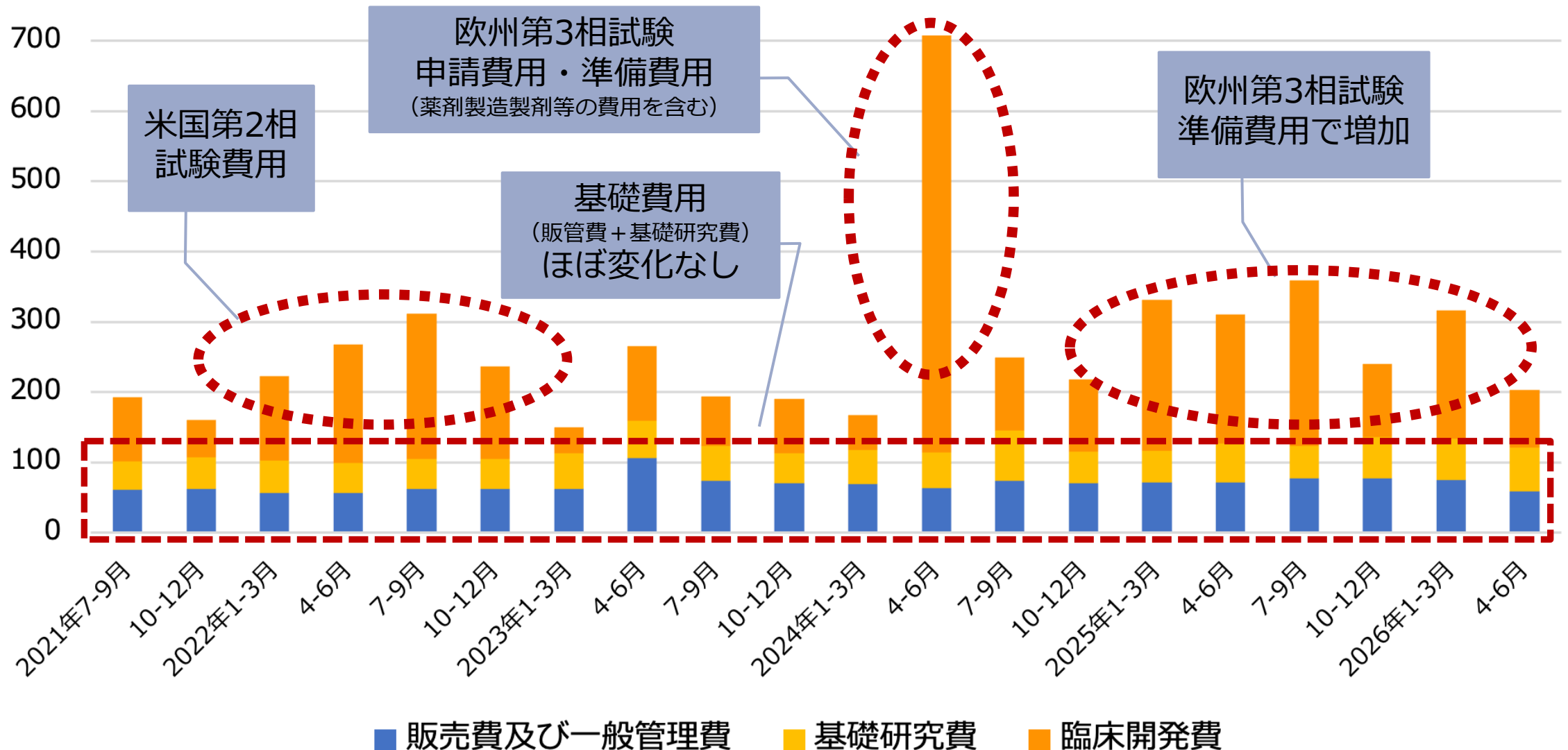
	2026年6月期	前年比	注
事業収益（売上高）	— 百万円		
営業利益	△1,358 百万円	損失増 249 百万円	
経常利益	△1,307 百万円	損失増 151 百万円	
当期純利益	△1,308 百万円	損失増 151 百万円	

*1 共通の人員・設備・消耗品等が多数あるため、基礎研究段階のプロジェクト個別の費用内訳は算出していません。

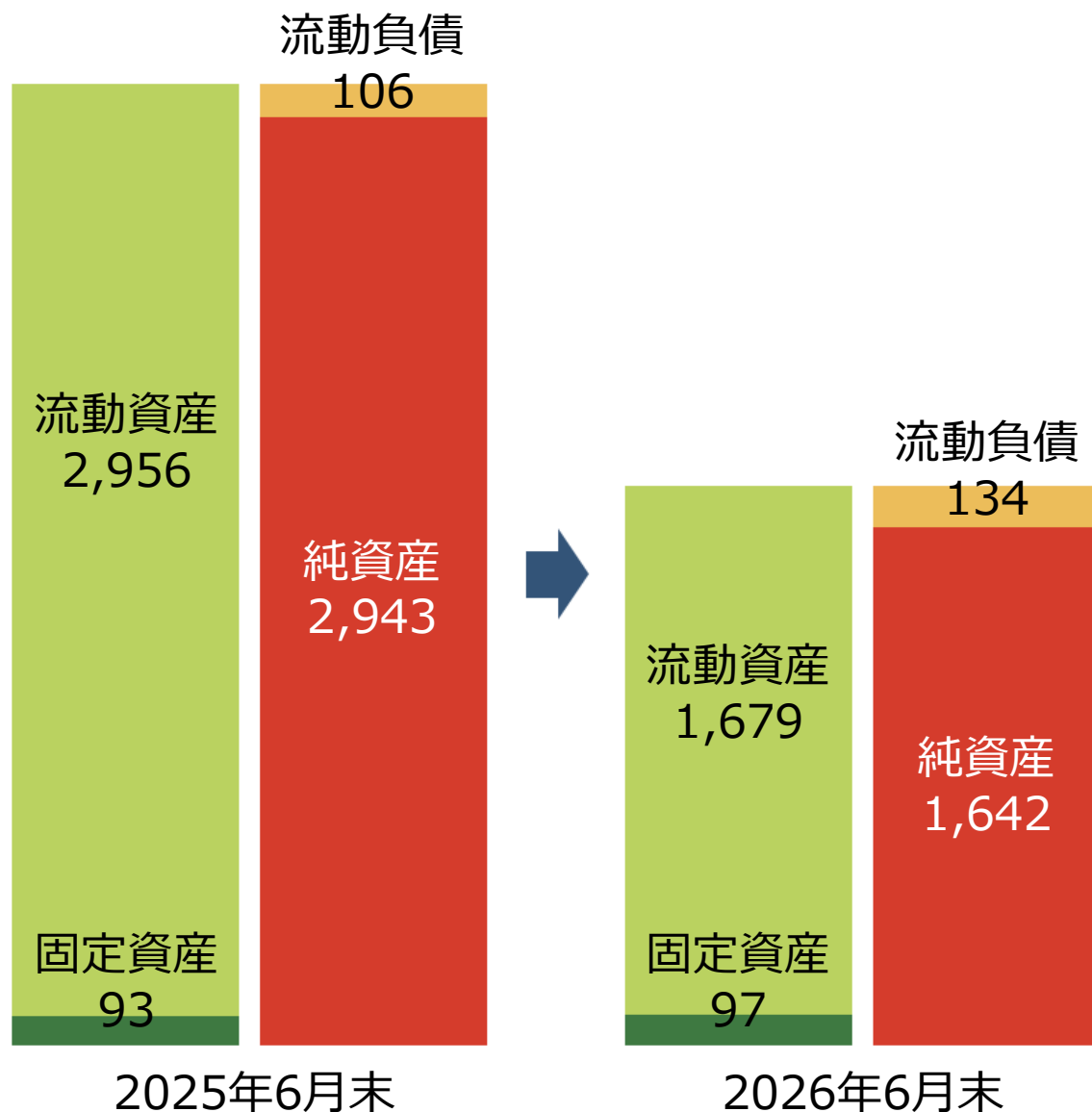
*2 臨床開発費は全額がCBP501関連の費用です。CBS9106・CBT005に関する費用はありません。

事業費用は主に臨床開発費で増減

四半期会計期間の事業費用推移（単位百万円）



2026年6月期の業績 (2)貸借対照表の推移 (単位：百万円)



2025年6月期末からの主な変化

➤ 流動資産

- ✓ 現預金 2,827 → 1,445
- ✓ 前渡金 62 → 184
 - 第3四半期末（2026年3月末） 292百万円
 - 薬剤製造製剤化等規制対応の進捗により第4四半期に費用計上が進みました

*百万円未満切り捨て表示のため合計などが一部一致しません。

企業価値評価向上への施策

企業価値
||
成功時の
パイプライン
価値の
総和

× ディスカウント = 足元の市場評価

一般的ディスカウント要因

- 成功確率
- 時間価値

当社/創薬に特有の要因

- 開発継続資金の懸念
- 評価の困難性
 - ✓ 一般に代替的評価方法とされてきた製薬企業提携の有無や内容が使えない
- 情報開示の制約
 - ✓ 臨床試験情報
 - ✓ 規制当局との協議内容

足元の市場評価が変化した要因

- パイプライン価値の周知
- 開発継続懸念などディスカウント要因が薄れた
- 開発進捗の内容が見え、その価値評価が企業価値評価に反映され始めた

市場評価のさらなる向上に向けて

- **開発のさらなる進捗と成果の公表**
- **丁寧な投資家リレーション**
- **開発資金と継続性を維持する資金や体制の確保**

利益実現までの開発期間・成功確率・不確実性

➤ CBP501臨床第3相試験を完遂できるか

- 欧州臨床試験開始承認獲得の期待（時期の不確実性）
- 試験期間の見通しと成功確率
- 開発環境や開発資金の確保

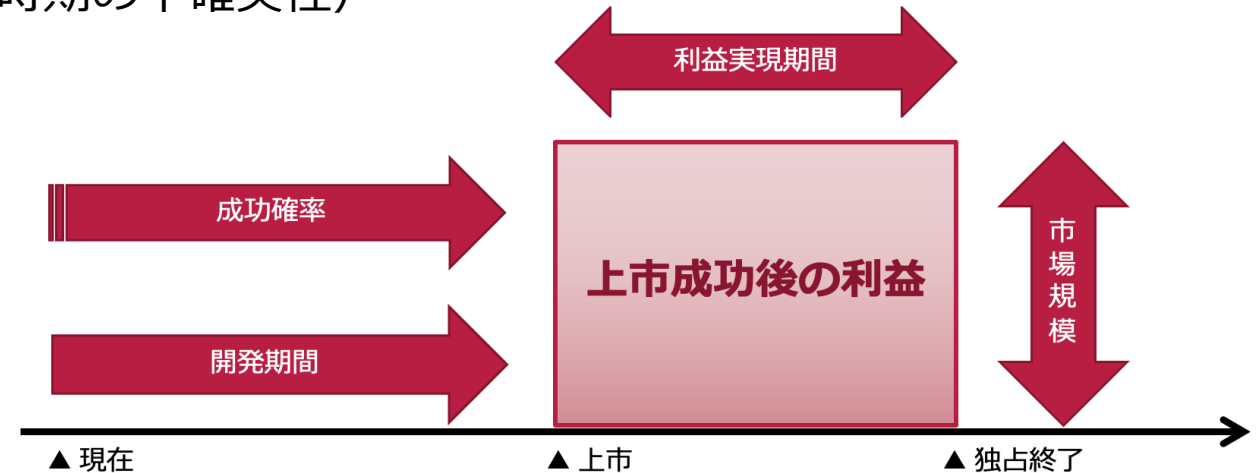
➤ 新薬承認を獲得できるか

- これまでの良好な臨床試験データ

CBP501上市成功後の利益

➤ 臨床第3相試験成功時の成功規模

- 欧州ほか主要市場の患者数・薬価・シェアなど。長期的な市場の変動も考慮
- 他のがんへの適応拡大の期待
- オーフアン指定による欧州10年・米国7年の独占保護



今後の資金需要と方針

CBP501が営業キャッシュフローに貢献するまでの資金需要

➤ **CBP501開発（臨床第3相試験・新薬申請）費用**

- ✓ 臨床第3相試験費用見通し：

現時点で45-50億円（費用総額と支出時期は今後変動する可能性あり）一部は既に支出済み

- ✓ 試験の開始には現有資金で全く問題ないが、完遂までには不足が想定される

➤ **基礎費用**

- ✓ 基礎研究費＋販管費：四半期あたり1～1.5億円で今後も大きな変動はない見込み
- ✓ 後続パイプラインの創出・開発は中長期的な企業価値向上のため不可欠

追加資本政策を検討する際のポイント

- ✓ 補助金・助成金、提携等に伴う入金（契約一時金・資本提携第三者割当増資）が望ましい
- ✓ 株式市場からの調達を検討する場合には、株主価値の毀損や希薄化を可能な限り回避・抑制するタイミングと方法を追求

キャンバスを知る情報源

多様なチャンネルで積極的に情報を発信しています

ウェブサイト <https://www.canbas.co.jp>

- [会社ご紹介資料](#)（不定期更新）
- [マネジメントブログ](#)（不定期更新）

X（旧Twitter）公式アカウント <https://x.com/canbas4575>

- フォロワー7,000人超。主に個人投資家向けの情報発信/Q&Aチャネルとして定着

アナリストレポート

- フェアリサーチ 2025年9月8日最新版『[Phase3開始に向けて着実な歩みは継続中](#)』
- シェアードリサーチ（随時更新） <https://sharedresearch.jp/ja/4575>

動画配信（TV・インターネット番組等出演）

- 2026年6月期第2四半期（中間期）決算説明会 [動画](#)・[テキスト](#)（2026年2月18日開催）
- アイロゴス主催 櫻井英明WEB株式講演会&企業IRセミナー等
[2025年2月22日](#)（河邊登壇） [2026年4月22日](#)（加登住登壇）

免責事項・今後の開示

免責事項

- 当資料に記載された内容は、現時点において一般的に認識されている経済・社会等の情勢並びに当社が合理的と判断した経営計画に基づき作成しています。
- しかしながらこれらの内容は、経営環境の変化等の事由により、予告なく変更される可能性があります。
- また、今後の当社の経営成績及び財政状態につきましては、市場の動向等により、大きく変動する可能性があります。

今後の開示

- 当資料は今後、通期決算の発表時期（8月）を目途として、更新のうえ開示を実施します。
- 上記に関わらず、本資料の内容に重要な変更が生じた場合には、第2四半期決算の発表時期（2月）の更新・開示を実施するほか、随時更新のうえ開示を実施します。



■本資料に関するお問い合わせ先： 株式会社キャンバス 管理部 IR担当 Email IR@canbas.co.jp